

自選

五十首

井辻朱美



いつじ あけみ 一九五五年東京生まれ。東京大学理学部を経て大学院比較文学比較文化修了。「詩歌」終刊後「かばん」所属。歌集以外の著書に「風街物語」「遙かよりくる飛行船」「ファンタジーの魔法空間」「ファンタジー万華鏡」など。訳書多数。第二十一回短歌研究新人賞、第四十六回サンケイ児童出版文化賞、第二十七回日本児童文学学会賞を受賞。白百合女子大学文学部教授。

海に湧く風みなわれを思へとぞ宇宙飛行士の夜毎のララバイ

「地球追放」

宇宙船に裂かるる風のくらし色しづかに機械はうたひつつあり

少年のたてがみ透きてさやさやとはるかな死海にとほる夏風

碧瑠璃の翼に越ゆる秋ふかきわがたましひのヘルデン・テノール

粉雪にまみれし毛皮を喜びて蛮族のごとく帰りきたれり

「水族」

光年のしずかな時間草はらにならびて立てる馬と青年

額高き銀の馬らをしたがえてねむるがごとき風はふくなり

竜骨という名なつかしいずれの世に船と呼ばれて海にかえらむ

海という藍に播らるる長大な椎骨のさき進化の星くず

純白の毛皮ふぶけるその胸の傷跡あまた星よりきたる

「吟遊詩人」

死にいたるまでの愛とう言葉もて北半球に生れたる甲冑

水球にただよう小エビも水草もわたくしにいたるみちすじであった
ゴンドワナなる大陸がありし世も地球の河に風添い走る

楽しかったね 春のけはいの風がきて千年も前のたれかの結語

杳とほい世のイクチオステガからわれにきらめきて来るDNAの碎片

雪の降る惑星ひとつめぐらせてすぎとおりゆく宇宙のみぞおち

青空のきれいな経路ココ椰子のしなふ角度を思へばねむる

しんじつにおもたきものは宙に浮かぶ 惑星・虹・陽を浴びた塵

わたしだよ わたしの中に藍青らんじょうの声がうまれるパツハの水紋

まなざしに仰角30度の陶醉がある あなたはきけば指揮者だといふ

かずかずのはるかさに生きるものたちよ 椰子の木 雨 そして飛行船

椰子の葉と象の耳ほどの星の風が愛したかたちはなかった

いくたびの夏もかはらず綿飴のやうにつめたい雲の生き死に

ジェットラグのわが目にあまき若葉もてアーサー王の国はそよげり

石積みにとどろく風をまたぎゆくスコットランドの黒猫一騎

いつこよりここに到るや風は問ふ博物館ミュージアムの前にリュックをおろせば

われもまた異土の木の卓打ちながら来む世の綺羅のものがたりせむ

骨だけの竜が相討つフオワイエにふりそそぎくる アヴェ・ヴェルム・コルプス
〈まことの身体〉

その地下に納骨堂をもつゆゑにつまさきだちの塔のかなしみ

肩の高さひどく違へてつるされたトレンチコートコートの抱いてる熱

「コリオリの風」

「水晶散步」

距離ということのもたらず圧が、わたしの作歌動機のような気がします。それは遠いところや、はるかな時間のかなたに向かうもので、届きたいと同時に、なぜか知っているという感じ、もう少しで思いだす、というそんな痛いような、なつかしいような感触です。

「ここにある」「近いもの」も、それだけではどうとらえていいのかわからないので、時空間の遠近法のスコープの中に入れてしまうようなのです。そうしないと座標が決まらない。つまり、ある全体的「世界観」を立てて、その中にものを置いて処理する。

あまり短歌的な発想ではないのかもしれませんが。「地球追放」は宇宙船などが出てきたので「SF短歌」といわれ、「水族」のころはサメと恐竜にはまっていたので、「古生物短歌」になり、どちらも惑星レベルの時間を考えています。それとまた別の世界観として、神話と古代や中世の

音たてて頸骨まはすそのかみの恐竜たちが風きくさまに
たえず笑ふ水の心がしづまると底までとどく教会の尖塔

ファンといふ称号ばかりの美術館で別れてくれれば高くゆく雲

空港に腰かけてゐる 生まれる前にすべてが始まるのを待つていた席

はるかなる窓をゆびさす鐘の音が無限にとほく夢幻にちかく

戦友とは酸き色のきづな 父たちの輪がとほくなり万朶のさくら

みんなさがれ 極上のゆめなぞ見るやうな真打ちマタドールのばらいろの靴下

蓄音機のあたりあえかに空間のひびわれてゆく 歌こそ渴き

きらきらとなみだを張つたフレーズをたちまち越えてあとかたもない

レモンとシトロンの無法にかがやく夏がありこの宇宙にはあまたの太陽

地球一長身の種族 遠すぎる天にこたへて風車をまはす

どのやうな恋うたふともファルセットのすずしさのかぎりを許されたひと

追憶の揺れあうまよ波の板 世界の軸が星をさすとも

こんなにもまばゆい雲を肩にかけ勇者は北からかえつて来たのだ

高熱の草いきれのなか掻きわけて死ぬことのなきテノールがくる

恒星から来るやうにつめたい冬の夜は銃士の帽子をさげて歩かう

パパゲーノは羽毛をピーターパンは枯れ葉をまどふ半濁音の精霊たちは

朱夏の陽にまみれた首が天をなく恐竜といふ豪儀な一族

ひとつひとつ光を溜めた猪口として思ひ出の中を観覧車まはる

片腕をさしあげるときヒトだけが星雲と交信する 光れ、と

(歌集未収録)

伝説、すなわちファンタジーがあり、これは一方でわたしのメインの仕事になっています。この型のほうがわかりやすいので、引用が多くなっています。

「水晶散歩」は、ヨーロッパに毎年行つていたころの歌なので、時間スパンがやや短く中世からの千年くらいになっています。ヨーロッパとはつくづく、記憶の降りつもっている場所だと感じます。何百年もかけて建てた教会や石の街や遺跡が全部残っていて、そこに人々の思いがしみこんでいる。こういう場所ではタイム・ファンタジーが書かれるわけだと納得もしました。時間が目に見える形で層をなして溜まっているわけですから。そして現在は——やっぱり同じようなことを考えていますが、現実の時間や空間の上位存在である、サイバー脳内空間における時間や空間の作りだされかたに興味があります。映画「マトリックス」は衝撃でした。わたしたちは「現実」を感受しているのではなく、脳内刺激を自分の世界観の中に置きなおして、「現実Ⅱ夢」を作りだしているのだということ。それならば人類共通の夢への井戸を掘りたい。それがいま目指しているところです。